

同じ人斬りといわれた男に、土佐の岡田以蔵がいる。

桐野が西郷の下にいたように、  
岡田も土佐勤王党の党首武市半平太の下で  
土佐藩佐幕派の巨魁吉田東洋暗殺後の  
天誅の実行者として有名になった。

桐野と同じように貧困の最下級士族の出である。

似たような境遇なのだが、岡田の印象は暗い。

「明るさ」「暗さ」というのは、  
その人の心の様相、中身を外に感じさせるものであろう。

結果的には二人とも畳の上では死ななかったのだが、  
その終わり方は対照的であった。

岡田は、藩論が佐幕に傾き武市勤王党が壊滅の危機に瀕した時、  
捕らえられ武市らの嫌疑につき、  
拷問により自白を強要された。

その際の様子のであまりの意気地無さに、  
仲間達から自白を恐れられ、毒を盛られている。

それでは死ななかったが、  
まわりから、やはり足輕の出だ、  
まるで堪え性のない男だとさんざ嘲られ、  
悲惨な結末（自白の上、晒し首）を迎えている。

彼は、武市という超一流の志士のすぐ下にいなながら  
**「心の出世」**ができなかった。

党首武市自身の死に様が立派だっただけ、  
岡田の終わり方は無惨さが際だってしまう。

桐野は同じ極貧の、  
岡田と同じ武士としては最下級の出で、  
やはり武芸の腕一本で世に出るのだが、  
岡田とは印象がまるで違う。

彼は、明るかった。  
明るさの奥にはアイデンティティ（自分）があった。  
姿も良かったらしいが、  
人間苦境に陥ったとき、  
そんなものでは自分を支えきれはしない。  
中身があったのであろう。  
知識思想はもっぱら耳学問だったが、  
勇敢さと明るさで陸軍少将までゆき、  
最後は**西南戦争の影の主役**として華々しく散った。